

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 歴史学領域
山野 ケン陽次郎

【論文題目】
先史琉球列島における貝製品の研究

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

山野ケン陽次郎氏の「先史琉球列島における貝製品の研究」は、琉球列島の先史時代（紀元前5千年紀から紀元11世紀）における貝製装飾品の史的展開過程を論じたものである。隆起サンゴ礁を基盤とする島じまからなる奄美・沖縄地域は、岩石資源や動物資源は貧弱だがサンゴ礁海域に多くの大型貝類が棲息しており、人々はこれらの貝殻を生活物資の素材として活用してきた。中でも貝製装飾品は多彩で、この地域の文化的特徴を示す資料として学術価値が高く、これに関する先行研究も多い。

山野氏は、琉球列島の貝製装飾品の中でも華やかな意匠をもつことで著名な種子島広田遺跡の貝製装飾品が具体的検証を欠いたまま長く中国を淵源にするものだと説かれていることをまず問題とし、埋葬にともなった貝製品を分析して、広田遺跡の貝製装飾品の変遷は、墓型式、遺構の切り合い、層位、遺物の組合せを根拠にすると7段階に分けられること、表面に彫刻文様をもつ貝符は単純な形状のものから複雑なものに変化し、前者のうち無文のものは琉球列島に多いことを指摘して、広田遺跡の貝製装飾品の淵源は中国ではなく琉球列島にこそ求められると説く。次に氏は、広田遺跡にかかわる貝製装身具の全てにわたって存続状況を個別に検討し、その多くが広田遺跡登場前に琉球列島に存在していたこと、広田遺跡特有の貝符や竜佩状貝製品が、琉球列島で生まれた在地的形状から広田遺跡にみられる形状に変化することを型式学的に示して、自説が琉球列島の貝製装飾品の動向においても整合性をもつことを示した。以上をふまえ、その変化の背景に、広田遺跡人が九州古墳時代人による琉球列島との貝殻の交易に参入して九州や奄美・沖縄諸島に接触し、その文化的・技術的影響を受けて自らの埋葬習俗を変化させ、貝製装飾品を大量にもちいる特色ある習俗を成立させたと論ずる。

広田遺跡を事例とした研究を前提として、氏はさらに琉球列島全体の貝製装飾品を検討し、複雑な形状の貝製装飾品が縄文時代に九州から伝わった擦切技法の習得によって可能になった点、貝製品装飾品の形状に蝶やイノシシ、鮫歯など動物にかかわる意匠が共通して存在する点、弥生時代に九州で使用された琉球列島産巻貝製の腕輪が、沖縄諸島の習俗として定着していた点を指摘した。

以上の議論をもとに以下のように総括する。貝製装飾品は縄文時代前期に九州の縄文土器の南下とともに琉球列島に登場し、縄文時代後期の擦切技法の導入によって動物意匠の貝製装飾品が生まれた。その後九州弥生人との貝交易を通して九州的な貝製装飾品が流行し、弥生時代終末期に種子島広田遺跡において特徴的な貝製装飾品が生まれ、7世紀には貝製装飾品の製作が衰退した。琉球列島の貝製装飾品は在地と九州との関わりの中で展開し、ここに中国の影響を見いだすことはできない。

これまで琉球列島の貝製装飾品の研究は、その鍵の一つである広田遺跡出土の遺物の分析が容易でなかったことと検討すべき資料数が膨大であることが原因で、その検討対象は部分に留まり全体的な検討に至るものではなかった。山野氏は広田遺跡を詳細に分析し、これを含む大量の資料にたいして網羅的かつ徹底的な資料化を行い、これにもとづいて琉球列島の貝製装飾品の理解に独自の論を組み立て、新たな体系をもって従来の研究と対置させることに成功した。その内容は実証性と独創性に富

み、今後の琉球列島の考古学研究を大いに前進させる研究として高く評価できる。以上から本論文を博士論文として適格であると判断する。

【最終試験の結果の要旨】

平成 24 年 1 月 13 日（金）午前 10 時から 11 時半の間、文学部会議室において、審査委員 5 名の参加のもとに最終試験を実施した。最初に山野氏が論文の概要を述べ、ひきつづき審査委員ごとに質疑応答をおこなった。論旨にかかわる個別具体的な内容から考古学・歴史学の方法論、人文社会科学の一般的内容に及ぶ質問が出され、山野氏はこれらについて適切に回答した。審査委員は申請論文が学位を授与するに足るものであることを了解した。

よって、本審査委員会は、最終試験を合格であると判断した。

【審査委員会】

主査	木下	尚子
委員	小畑	弘己
委員	杉井	健
委員	足立	啓二
委員	鈴木	寛之